

名大医学部学友時報 2026 3

目次	
1. 教授退職 (1)	4. プレスリリース (10)
2. 退職挨拶	5. 会員寄稿
秋山 真志 (2)	櫻井 武 (12)
木村 宏 (3)	6. 支部だより
曾根三千彦 (4)	中国四国支部総会 (13)
豊國 伸哉 (5)	7. ご寄稿のお願い
松下 正 (7)	8. 後期学生生活報告 (14)
室原 豊明 (8)	9. 人生山あり谷あり
3. 人事ピックアップ	井口 昭久 (16)
田村 高廣 (9)	10. 編集後記

教授退職

※氏名の五十音順



運動・形態外科学講座
皮膚科学分野 教授

あきやま まさし
秋山 真志



微生物・免疫学講座
ウイルス学分野 教授

きむら ひろし
木村 宏



頭頸部・感覚器外科学講座
耳鼻咽喉科学分野 教授

そねみちひろ
曾根三千彦



病理病態学講座
生体反応病理学分野 教授

とよくに しんや
豊國 伸哉



輸血部 教授

まつした ただし
松下 正



病態内科学講座
循環器内科学分野 教授

むろはら とよあき
室原 豊明



退職挨拶

あきやま まさし
皮膚科学分野 教授 秋山 真志

この度、令和8年3月末をもちまして名古屋大学大学院医学系研究科を退職いたします。私は、2010年に、それまで約10年間勤めました北海道大学から名古屋大学に赴任いたしましたので、名古屋大学皮膚科教室の教授としての在任は、2026年3月で15年半になります。この間、学友会の諸先生をはじめ、本当に多くの方々に、いろいろな面で支えて頂きました。臨床面では、名古屋大学医学部附属病院皮膚科にお通いの患者さんとそのご家族に教えられて、また、病院の職員の皆様のおかげで診察して参りました。これまで名古屋大学で15年以上務め上げられたのは、ひとえに皆様のご支援のおかげと、心より感謝申し上げます。名古屋大学でのこの15年余の間、研究、診療、教育、教室等の運営に、常に前を向いてひたすら走って来ました。後ろを振り返る余裕は全くありませんでした。この学友時報の退職挨拶において、改めまして、これまで私を支えて頂きました学友会の諸先生への感謝の気持ちを述べさせていただきます。

これまでの日々を振り返るとき、研究、臨床、教育のあらゆる面で、名古屋大学皮膚科学教室の皆様をはじめ、名古屋大学の多くの方々に、私がどれだけ支えて頂いて来たか、本当に痛感いたしております。特に、この15年余の間に教室に籍を置いて努力して頂いた教室スタッフ、医員、大学院生、専攻医の先生方、関連病院を支えてくれた先生方、そして、秘書さん、実験助手さん、お一人お一人に、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。この15年余の間、大過なく教授を務めさせて頂いたことは、皆様のご支援の賜物とただただ感謝いたしております。

臨床においては、名大病院の皮膚科は、膠原病の診療、皮膚悪性腫瘍の集学的治療、遺伝性疾患の遺伝子診断等、様々な領域において、日本の皮膚科医療をリードする皮膚科の一つであると自負いたしております。幸い、多くの大変モチベーションの高い、優れた若い先生方が皮膚科にはいますので、安心して後進にバトンをお渡ししたいと思っております。今後も患者さんの立場に立った医療を提供して参りますので、名大皮膚科への益々のご支援をどうか、宜しくお願い申し上げます。

研究面では、私は一貫して、表皮の角化機序の解明と表皮分化疾患の病態究明、治療法の開拓に取り組んで参りました。私は、皮膚科医としてのキャリア初期に魚鱗

癬に出会い、表皮の分化（角化）機序の解明は、皮膚科医、皮膚科学研究者の仕事であると確信しました。名古屋大学に赴任する以前に、根本的治療のない道化師様魚鱗癬の出生前診断に取り組み、1992年から2年間、SeattleのUniversity of Washingtonで出生前診断と表皮の発生の研究を始めました。帰国後、本邦でも魚鱗癬の出生前診断を施行し、2005年にABCA12が道化師様魚鱗癬の疾患関連遺伝子であることを解明、遺伝子検査による出生前診断を可能としました。名古屋大学に赴任後、角層におけるセラミドバリアの形成機序と表皮セラミドの異常による表皮分化疾患の発症機序の多くの部分を解明いたしました。3年前からは、魚鱗癬を含む、表皮分化疾患の国際分類、国際病名の抜本的改訂のために世界各国から集まったエキスパートから成るタスク・フォース、Reclassifying Epidermal Differentiation Disorders Initiative (REDDI) のコア・メンバーの一人として、国際病名改訂に取り組んで参りました。そして、昨年、魚鱗癬、魚鱗癬症候群、掌蹠角化症をはじめ、遺伝的表皮分化障害による全ての疾患の国際分類・病名を、表皮分化疾患 (Epidermal Differentiation Disorder; EDD) として包括的に改訂いたしました。この改訂により、より広い範囲の表皮分化疾患に対応可能な堅牢なシステムが構築され、さらに、人名（ネザートン症候群など）や、「魚鱗癬」、「道化師様」などの軽蔑的とみなされる用語も疾患名から削除できました。この疾患関連遺伝子産物としてのタンパク質の機能と関連経路による表皮分化疾患のグループ化は、各表皮分化疾患に対する治療標的の明確な同定と、他の疾患のために開発された薬剤の repurposing の可能性に繋がることが期待されます。

名古屋大学皮膚科は120年という長い歴史を有していますが、その中の15年余を私が教授を務めさせて頂いたことは、私にとってまさに運命的なものであり、大変光栄に感じておりますし、大きな誇りです。私の退任後、名古屋大学皮膚科は、さらに発展し、世界の皮膚科学と皮膚のサイエンスの進歩に貢献して行くことと確信いたしております。学友会の皆様、今後も、名古屋大学皮膚科を暖かく見守って頂ければ幸甚に存じます。本当にありがとうございました。



退任のご挨拶

ウイルス学分野 教授 ^{きむら}木村 ^{ひろし}宏

本年三月をもちまして、名古屋大学医学部・大学院医学系研究科を退職いたします。長年にわたり母校に勤務する機会を与えていただきましたことは、私にとりましてこの上ない名誉であり、まずは学友会会員の諸先生方に謹んでご挨拶申し上げます。

1998年に附属病院小児科の非常勤医員から助教に任ぜられて以来、二十八年にわたり名古屋大学において教育・研究に従事してまいりました。2005年には微生物免疫学講座ウイルス学分野へと異動し、2012年からは同分野教授として教室を主宰する立場を拝命いたしました。多くの学生、大学院生、そして同僚に支えられながら教室を運営してまいりましたが、若い頃、退職される諸先生が「三十年名大で教えた」と語られるのをどこか遠い世界のことに聞いていた自分が、いつしか同じ年月を重ねる側に立っていることに、今あらためて深い感慨を覚えております。

もともと私は本学医学部を卒業後、一臨床医として小児医療の現場に身を置くところから出発いたしました。地域の一般病院で診療に追われる日々のなかで、自らの勉学の至らなさを痛感するとともに、医学を基礎から問い直したいとの思いが募り、大学院の門を叩きました。そこでウイルス学の世界に触れ、その奥行きと可能性に魅了されて以来、気がつけば三十五年以上にわたり研究に携わることとなりました。研究におきましては、ヘルペスウイルスを中心とする基礎・臨床研究を推進し、とりわけがんウイルスであるEBウイルス関連腫瘍性の病態解明に取り組んでまいりました。臨床の現場で直面した疑問を出発点として、ウイルスの感染機構や宿主免疫応答の解析、さらには発がんに至る条件の解明といった基礎的課題へと研究を発展させ、ヒトがんウイルスに関わる根源的問題に挑みました。また、ヘルペスウイルスにとどまらず多様なウイルスを対象とした研究にも携わり、学内外の研究者や臨床グループとの連携を通じて、ささやかながら医学・医療の進展に寄与できたのであれば望外の喜びであります。こうした歩みを続けることができましたのも、母校の懐の深さと、同窓の諸先生方の温かい励ましのおかげと存じます。

大学運営に携わる機会も長く頂戴いたしました。2017年度より五年間、学部教育を担当する副研究科長とし

て、さらに2022年度からの三年間は研究科長・医学部長として、通算八年にわたり運営の一端を担うこととなりました。医学教育分野別認証評価への対応を契機とした教育課程の見直しや、Global Alliance of Medical Excellence (GAME)、Joint Degree Program (JDP)、卓越大学院CIBoGといった国際的・先進的プログラムの推進、さらには研究科全体の予算配分、施設整備、人材配置の調整など、研究と並行して多岐にわたる業務に向き合う日々でございました。いずれも容易な課題ではありませんでしたが、大学という組織を俯瞰し、その将来像を真剣に考える貴重な学びの時間であったと感じております。

なかでも、私が準備委員長を務めました創基150周年記念事業に際しましては、学友会会員の皆様から格別のご高配を賜りました。「キャンパスアイデンティティの実現」を掲げて鶴舞キャンパスの整備に取り組み、医学部史料館の移築、サクラテラスの新設、さらに学生広場ならびにメインストリートと正門の整備を進め、本年三月にその大半が完成いたしました。記念事業の構想段階から実施に至るまで、物心両面にわたる多大なるご援助とご協力をいただき、無事に節目の年を迎えることができました。学友会の皆様のお力添えなくしては到底叶わぬことであり、心より御礼申し上げます。

振り返れば、研究・教育・運営のいずれにおきましても、私一人の力で成し得たことは何一つございません。常に多くの先輩、同僚、後輩、そして学友会の諸先生方に導かれ、支えられてまいりました。退職という節目にあたり、あらためて母校と同窓の絆の尊さを噛みしめております。大学が社会とつながり続けるうえで、学友会の存在がいかに大きなものであるかを、身をもって実感いたしました。

教壇を離れた今後は、一会員として学友会の末席に連なり、微力ながら母校の発展に貢献してまいり所存です。学友会のますますのご隆盛と、会員の皆様のご健勝・ご活躍を心より祈念申し上げ、退職のご挨拶とさせていただきます。長年にわたり賜りましたご厚情に、心より感謝申し上げます。



退職のご挨拶

頭頸部・感覚器外科学耳鼻咽喉科学講座 教授 そねみちひこ
曾根三千彦

学友会の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。この度定年退職を迎え、ご挨拶をさせていただきます。1905年(明治38年)9月に開講した耳鼻咽喉科学教室は、昨年開講120周年を迎えました。留学から帰国後、関連病院勤務を経て2000年8月に帰局し、2016年2月より第8代教授を務めてまいりました。この25年間、臨床および教育・研究さらに人事に関して、多くの診療科や事務の皆様にご指導やご協力を賜りましたことを、心から御礼申し上げます。専門領域である耳科学や聴覚を中心として感覚器外科学に従事してきましたが、難聴診療は診断のみならず治療において大きく進歩しました。今まで臨床症状や生理学的検査では困難であった内耳障害の病態把握が、MRI画像検査や遺伝子検査にて可能となりました。また、両側高度難聴症例に対してのみ施行されていた人工内耳手術も、補聴器装用効果が乏しい症例、さらには一側性高度難聴への適応承認となる時代になりました。その背景には、認知症を含めて難聴がQOLに及ぼす影響が確認されたこともあります。2021年7月、念願であった難聴支援・治療センターが名大病院に設立されました。難聴は、目に見えない障害です。障害者のみならず、ご家族や対応する医療従事者も含めて、難聴に対する適切な支援と医療の提供を目指し診療を心掛けてきました。センター設立後、鼓室形成術や人工内耳手術件数の増加に加えて、聴力検査は正常でも言葉が聞き取れない「聞き取り困難症(聴覚情報処理障害)」の症例が多く来院されるようになりました。メニエール病患者の増加も含めて、現在のストレス社会を反映している影響でしょう。

2019年から5年間、病院執行部の一員として勤務する機会もいただきました。小寺泰弘前病院長の下、教育・研究・人事に加えて、医師の働き方改革推進担当の副病院長を務め、多忙な日々ではありましたが多くの経験を積むことができました。当時は、新型コロナウイルス蔓延し、病院収支も

未曾有の危機に見舞われ医療業務が疲弊する中、2024年からの働き方改革に向けて、多くの診療科長に時間外労働減少に向けてのご対応をお願いに回りました。当初名大病院では困難と思われていた働き方改革でしたが、担当事務局の方々のご尽力や社労士の先生のご指導をいただき、改革案が無事に承認されたことに大変安堵しました。

2021年名古屋大学医学部は創基150周年を向かえ、さまざまな催しが企画されました。丁度その頃、太平洋戦争末期にサイパン島で米海兵隊員が見つけた日章旗の持ち主についての情報提供を求めるメールが教室に届きました。長年軍旗と思われるその日章旗には、「名古屋医科大学耳鼻咽喉科学教室」と書かれており、当時の教授をはじめ多くの方々の署名も確認できました。日章旗の写真から当教室との関わりを確信し、過去の教室記念誌数冊を読み解いて調査を始めました。その結果「祈 武運長久」と書かれた日章旗は、昭和19年サイパンで戦死された同窓会員が所持されたものであることが判明しました。前途ある20代の若者が、医師として活躍する機会もなく戦争の犠牲者になったことを改めて思い知らされました。2005年に発刊された教室開講百周年誌には、昭和17年当時の聴力検査室で行われた同窓会員5名の戦没者慰霊祭の様子を伝える写真が掲載されており、戦争の犠牲者となった同窓会員数は16名にまで及んでいます。新型コロナウイルス蔓延により、上気道を扱う耳鼻咽喉科は診療制限を余儀なくされ閉塞感が漂う中、診療科長としてその対応に悩んでいた頃でした。比較すべきことではありませんが、本業の医療を通じて社会貢献できることは有り難くさえ感じ、どのような状況であっても前を見据えて今できることをすべきであると感じたことを覚えています。

診療・研究・教育という医育機関の医師としての業務に加え、任期後半にはその他多くの貴重な経験を積むことができました。無事退任できますことを、改めて皆様に感謝申し上げます。



退職のご挨拶

生体反応病理学分野 教授 とよくに 豊國 しんや 伸哉

学友会の皆様に定年退職のご挨拶を申し上げます。生体反応病理学・分子病理診断学分野（第1病理）の森 尚義教授のご退任に伴い、2008年7月に教授に着任し、第7代目の教授として17年9ヶ月の間、同分野を担当させていただきました。本講座は1906年に京都大学から来られた藤波 鑑門下の林直助教授を初代として開設されており、また第4代の飯島宗一教授は私のメンターのひとりである京都大学医学部病理学教室 翠川 修教授と従兄弟の関係であったともお聞きしており、今でも強い御縁を感じている次第です。担当させていただいた期間は長かったのですが、実感としてはあっという間でした。それは何より、研究科内・名古屋大学学内のいろいろな方と知り合い、支えていただき、大変充実した日々を過ごすことができただと考えると、私と関わりのあったすべての関係者の方々に厚く御礼申し上げます。特に、同時期に病理学の教授であった、高橋雅英先生、中村栄男先生、榎本篤先生、加留部謙之輔先生にはたいへん御世話になりました。

私は、1985年京都大学医学部を卒業後、天理よろづ相談所病院で2年間の初期研修を行いました。病理学教室には学部4年生のときから出入りして実験の一部をらせていただいていたので、自然な流れで母校の病理学教室の大学院博士課程に入学しました。これは現在の医学部3年生の「基礎医学セミナー」に極めて類似したところがあります。当時は「酸化ストレス」という概念がまだできたばかりであり、同時に、講座では鉄ニトリロ三酢酸による腎臓がんが見つかったばかりで、私はそれに夢中になり、今日に至るまでその勢いで走ってきたという感があります。当時の病理学教室はたいへんクラシックな場所であり、私が分子生物学に触れたのは米国 Food and Drug Administration に留学した1990年代になってからです。留学後は、縁あって愛知県がんセンターから京都大学病理学教室教授に就任された日合 弘先生のお誘いを受け、京都大学に助手として帰国し、その後15年ほどを過ごすこ

とになりました。

名古屋大学に着任してまず驚いたのは、奇しくも高橋雅英先生が言われた「名古屋は巨大な田舎ですよ」に関連しますが、医学生生の90%近くが東海3県出身者だということでした。本件は名古屋大学のさらなるグローバル化のためにも是非入試制度の改革などで徐々に変わっていけばと感じています。名古屋大学に着任して研究者として最もよかったことは、共同実験施設の充実ぶりです。これは医系研究棟3号館の完成により実現されましたが、貝淵弘三先生・高橋雅英先生の先見の明によるものとお聞きしています。私が名古屋大学に来てから、250編以上の論文を出せたのもこの充実したシステムのおかげであるといっても過言ではありません。京都大学では、酸化ストレスマーカーの開発、鉄誘発腎臓がんの解析などを中心に研究を進めておりましたが、名古屋大学に異動した頃から、アスベスト発がん機構の解明など社会的な問題にも取り組むようになりました。また、名古屋大学においては、理学研究科・工学研究科・環境学研究科の先生方とも密に研究をする機会に恵まれ、カーボンナノチューブの発がん性を決定する因子の同定（篠原久典先生、低温プラズマの生物作用の解明（堀 勝先生）、鉄硫黄鉱物の鉄代謝における意義などを明らかにすることができました。また、2019～2024においては、馬場嘉信先生を領域代表とするCREST「細胞外微粒子」内のプロジェクトに代表として参画させていただき、CD63陽性エクソソームの鉄代謝における新たな役割を解明することができました。こうした御縁で、2020年からは名古屋大学低温プラズマ科学研究センターの副センター長を務めさせていただきました。鉄代謝研究の流れでは、2012年に提唱されたフェロトーシスの概念をいち早く取り入れたのが奏効し、現在、眼科学も含めた相当広範囲の分野の発展につながっているのはたいへんうれしく思うところです。また、祖父江 元先生からの命により Nagoya Journal of Medical Science 誌の編集長を15年間務めさせていただきました。この間に雑誌

が成長し、学位論文を掲載するにふさわしい質を備えるようになったことを、大変誇りに思っております。

医学教育に関しては、病理学のカリキュラム構成を17年間担当させていただきました。また、高橋雅英先生と世界で最も使用されている教科書ロビンズ基礎病理学を4版に渡って監訳することができたのもいい思い出です。

ここからは、私が若手研究者に望むことを書かせていただきます。少々差し出がましいですが、これまでの私の研究に関する経験からいうと、40才までに何とか自分のトレードマークを作してほしいし、研究者として生きていくなら絶対に必要である。大学院生やポスドクの研究テーマはどうしてもボスから与えられるものなので、あたりはずれがある。遅くとも、ポスドクのときから10年先を俯瞰し、自分がどこを攻めていくのかをよく考えてほしい。やはり、新しい技術は研究における武器である。新たな技術をどれだけ早く取り込めるかも重要な要素である。また、動物でも何でもいいが、他の研究者に簡単には真似のできないような独自のモデルを作ることができれば、たいへん強いと思う。最近では、臨床医学への還元も相当早くなってきている。他学部や医療関係者も併せた独自のネットワークを早期に築いていくことが重要である。

私は縁あって、2000年くらいから学会関係の多数の雑誌編集に関わってきた。Nagoya Journal of Medical Science 誌も編集長を15年に渡って務めさせていただいた。こうした立場からわかることは、中国・インド・イラン・トルコからの論文投稿が本当に指数関数的に増えていることである。よく日本のトップ10%の論文数がどんどん相対的に下がっていると近年警告されているが、それを現在実感している。おそらく論文を書くこと自体にAIを多用しているように思われるが、研究者人口も増えていると思われる。私は前から言っているが、日本の研究者は論文の査読数が少なすぎる。査読には作法があるが、それに慣れてしまえば、それほど苦痛なことでもなく、アイデアや論文の書き方を学べるというメリットの方が多いと思う。若手研究者には1週間に1報の論文の査読をすることを目標にしてもらいたい。よほど長いものでない限り、3時間ほどでできるようになってほしい。査読の依頼が多数来るようになって、editorial board member でなければ、忙しければ断ったらいい。日本からの論文の

発信を増やすためには、若手がかかると査読を引き受けることがその第一歩だと考えている。海外のポスドクだと、自ら査読を送ってほしいと言ってくるような研究者も結構いるのである。

以下の5つが、私からの若手研究者へのメッセージになります。

- 研究は論文にしなければ意味はない。研究者にとってはキーボードが剣である。
- 新しい研究空間を開拓しよう。10年先を俯瞰しよう。
- 国際学会で発表しよう。
- 仮説は大胆に。証明は綿密であれ。
- 所属学会は少なすぎても、多すぎてもいけない。

名古屋大学が国際卓越大学に早く採用されることを祈念しています。名古屋大学は最後9番目のいわゆる「帝国大学」で教官の定員も他大学より少ないのですが、その割には研究業績も含めて頑張ってきました。国際空港があり、日本全国へ短時間でいける立地、日本最大ともいえる大型産業の集積、かつ豊かな農業・漁業・林業。これらを活かして、もっと世界に拓けた大学に発展して欲しいと願っています。名古屋大学には「勇気ある知識人」という自由な気風があります。これをいつまでも忘れないでほしいと思います。

私の研究スタイルとしては、最初に教わったことから結局はずれることなく、片足を残すかたちで発展してきました。これがベストであったかどうかはわかりませんが、自分の感覚として「鉄は生命の根源である」という直観があったからだだと思います。研究はマラソンと同じで、忍耐力が必要です。一筋縄ではいかず苦しい局面が多いのは事実です。しかし、あるところで、急に景色が開けることがあるはず。ここまで研究を進展させることができたのは、記載させていただいた多くの研究仲間だけでなく、教室のスタッフや学内外の先生方のご支援や叱咤激励によるものです。また、京都大学～名古屋大学と多くの優秀な技官の方々に御世話になりました。この場を借りて、心より御礼申し上げます。今後、名古屋大学から世界に羽ばたく研究者が沢山生まれることを心より祈念いたします。



退職のご挨拶

まつした ただし
輸血部 教授 松下 正

このたび、令和8年3月をもちまして名古屋大学医学部附属病院輸血部教授を退任することとなりました。1988年に大学院修士課程に入学して以来、第一内科（現・血液内科）での臨床・研究生活、そして輸血部・検査部での診療・管理業務と、長きにわたり母校である名古屋大学で活動させていただけたことは、望外の喜びであり、支えてくださった学友会の諸先生方に深く感謝申し上げます。

振り返りますと、名大病院輸血部の歴史は昭和47年(1972)の院内措置としての発足に遡ります。平成14年(2002)に初代教授として就任された高松純樹先生のご尽力により、当院は国立大学病院としてはいち早く検査部技師との合同当直体制を確立し、24時間体制での輸血管理を実現しました。後に「名古屋モデル」とも呼ばれるタイプアンドスクリーン(T&S)による交差適合試験の省略や、バーコード照合システムの導入など、現在では全国標準となっている輸血安全対策の多くが、ここ名大病院で先駆けて実践され、日本の輸血医療をリードしてきたことは、私たちが誇りとすべき教室の伝統です。

私は平成22年(2010)に第二代教授としてそのバトンを受け継ぎました。就任以来、血液内科出身であるバックグラウンドを活かし、血友病やフォン・ヴィレブランド病(VWD)などの血栓止血疾患の専門診療と分子病態解明に取り組んでまいりました。こうしたこれまでの成果を踏まえ、近年では鈴木伸明講師を中心として「血栓止血研究コンソーシアム(J-THReC)」が設立されました。これは、恩師である齋藤英彦先生(旧第一内科教授)から小嶋哲人先生へと受け継がれてきた名古屋大学血栓止血グループの系譜を基盤とし、病態解明と治療法開発を目的に結成された多施設共同体です。「熱い志」を持った若手医師や検査技師といった同志と共に、基礎研究から医師主導治験に至るまで全方位的な活動が展開されており、難治性疾患の遺伝子解析や世界的な医学誌への論文発表を通じて、アカデミア発のエビデン

スを世界へ発信し続けていることは、私にとって大きな喜びです。

また、附属病院においては副病院長・病院長補佐として、国際的な医療機能評価であるJCI(Joint Commission International)の認証取得や、電子カルテ管理室長として診療の質に直結する電子カルテシステムの機能向上にも携わらせていただきました。診療業務の品質を向上させ、患者さんの安全を守るというミッションの達成に向け、部門の枠を超え多くの職員の皆様と一つの目標に向かって汗を流した日々は、私にとってかけがえのない財産となっております。

私の在任中、輸血医療を取り巻く環境は劇的な変化を遂げました。従来成分輸血や造血幹細胞移植に加え、近年では遺伝子治療やCAR-T細胞療法といった細胞治療の需要が急速に高まっています。輸血部は現在、細胞治療管理の中核としての役割を担っており、次世代の医療を支える基盤として、その機能と責任はますます重みを増していくものと確信しています。

最後に、導入が進む「血小板製剤の細菌スクリーニング」について一言触れさせていただきます。本制度により製剤の有効期間が従来の4日間から6日間へ延長されています。それに伴い保存中の凝集物が増加する可能性があります。細菌スクリーニング陰性の製剤のみが供給されていますので品質に問題はなく使用可能とされています。しかし輸血前の血小板製剤の外観確認という基本は変わらず徹底していただくようお願いいたします。

定年退職を迎え、改めてこれまでの医師人生を振り返りますと、多くの恩師、先輩、同僚、そして患者さんに恵まれた30余年でした。名大病院輸血部が培ってきた「安全の文化」と「挑戦の精神」が、次代のスタッフによってさらに発展し、多くの患者さんの命を繋いでいくことを祈念しております。学友会の皆様の長きにわたるご指導とご厚情に、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。



退職のご挨拶

むろはら とよあき
循環器内科学分野 教授 室原 豊明

名古屋大学医学部学友会の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。このたび私儀定年退職を迎えましたので、貴重な学友会時報誌面をお借りしまして一言ご挨拶を申し上げます。私は2002年から約24年間、名古屋大学大学院医学系研究科・循環器内科にお世話になりました。これまでの人生で熊本県・大分県・米国（ペンシルバニア州・マサチューセッツ州）・福岡県、そして愛知県と渡り歩いて来ましたが、名古屋市の居住が最も長くなりました。約24年という永きにわたり、名古屋大学の皆様にご指導とご鞭撻を頂きましたことを、心より感謝申し上げます。私の母の祖先は尾張から来たかもしれないと聞いており、母親方は遠い昔にこの地から九州に来たこととなりますので、そういう意味では私はむしろ故郷に帰ってきたのかもしれません。

私は1985年に熊本大学医学部を卒業し、直ちに熊本大学循環器内科に入局しました。当時の熊本大学の初代循環器内科教授であられた泰江弘文先生は、静岡市立市民病院・循環器部長からの熊本大学ご就任で、ここでも東海地区とご縁があります。大学院での基礎研究の後、済生会熊本病院に赴任して3日に1回は病院に泊まる生活をしていました。その後留学の道を決意し、Jefferson医科大学・Tufts大学と2か所でポスドクを経験しました。その頃に私の研究の道筋や、論文の書き方・英会話能力などが育ったと感じております。特にTufts大学の故Jeffrey M. Isner教授からは多くの薫陶を授かり、私の一生の財産となりました。帰国後は義兄のいた久留米大学医学部第三内科に国内復帰し、血管再生・血栓・動脈硬化症・炎症などの基礎・臨床研究と実地臨床技術の「リハビリ」を行いました。当時は冠動脈形成術（PCI）も行なっておりました。久留米大学は私立で高度救命救急センターもあり、急患もガンガン受け入れる大学病院で本当に勉強になりました。研究が比較的うまく進み、当時の政府のミレニアムプロジェクト（再生）や、大型の全国研究に参加することもできました。

私は45歳まではアカデミアで頑張ってみて、道が開けないなら開業医か勤務医になろうと思っておりましたが、2002年に思いがけず本学循環器内科（当時器官制御内科）に職をいただくことができました。最初は「名大という大きな大学の教授が自分で本当に大丈夫なのか？」という強い不安と緊張に駆られ、名古屋に降り立ちました。それより2ヶ月前に九州大学から赴任されていた血管外科の古森公浩教授も同じ気持ちであったと後から伺いました。しかしながら多くの先輩や学内外の皆様にも暖かく支えられ、なんとかここまで来れたという次第です。新生の名古屋大学循環器内科グループと多くの関連病院がございましたので

「とにかく一人でも多く入局していただき、研究費が盤石に取れないといけない」というこの2点だけで頭の中が一杯でした。その後は自己の研究の推進のみならず、教室全体の研究の推進、研究の多様性が大事だという認識で、基本的に各教官がやりたい研究をそのままやっただけで、どんどん伸ばしていこうという方針にしました。またできるだけ海外留学生を出して、私と同じように海外の研究・臨床環境で刺激を受けて、遅くなって新しい情報と技術を持ち帰ってもらいたいという方針にしました。以上のような結果、この24年で550名を超える入局者と、比較的充足した研究費の獲得ができました。名古屋大学循環器内科からは、群馬大学循環器内科（石井秀樹先生）、三重大学分子生理学講座（坂東泰子先生）、藤田医科大学循環器内科（井澤英夫先生）、愛知医科大学循環器内科（天野哲也先生）、自治医科大学公衆衛生学（市原佐保子先生）、埼玉医科大学臨床検査医学（竹下亨典先生）などの各講座に、教授や主任教授を輩出することができました。また海外でも2名の同門の先生が、ジョンスホプキンス大学公衆衛生大学院（松下邦洋先生）、フロリダ大学循環器内科（山田功先生）の教授に就任しています。

また、歴代心臓外科教授であられる上田裕一先生、碓氷章彦先生、六鹿雅登先生とは、協働で中部地区に心臓移植施設を作るという命題の元、当科からも奥村貴裕医師や近藤徹医師に、国内心臓移植の中心施設の1つである大阪大学への国内研修を行なっていただき、ついに2017年4月から東海地区での心臓移植を開始することができ、現在は30例にまで至っております。ここまで立ち上げていただきました関係の皆様にも厚く御礼申し上げます。

最後に心に残る場面といたしましては、2011年3月の東北大地震であります。地震当時、1号館の7階はまるで船に乗っているかのように大きく長く揺れました。これはただ事ではないと思い震源地は東海かと思いきや、まさかの東北三陸沖でした。東北の地震で名古屋がここまで揺れるとは何という大きさだと思っておりましたところ、不安は的中し後は皆様のご存知の通りです。名大病院からはすぐに松田直之先生を隊長とする独自の災害対策支援活動隊が現地に赴き、医療支援活動をされました。その第一次派遣隊の報告会の場面で、当時病院長であられた松尾清一先生が思わず感激して涙されたことは、今も私の思い出に残る最大の感動場面です。

最後に、長きに渡り私を育てていただいた名古屋大学医学部学友会の全ての皆様にも深く感謝申し上げます。学友会の皆様のご健勝と、名古屋大学医学部のますますの発展を祈念致しております。ほんとうにありがとうございました。